

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴について(2)

前 田 禮 子

*Moby-Dick*には、さまざまなテーマがふくまれている。それぞれのテーマについては、各論で述べることになるが、それにさきだって全体にわたって、およその総論を述べなければならぬ。しかし引用文の裏づけなく全体にわたって解釈を試みるなら、事実にとぐわれないとして、誤解をまねくおそれがある。それでも、ある程度は、はじめに全体について述べる必要があるだろう。

*Moby-Dick*の主題は、復楽園である。復楽園の可能性を Melville が信じていたというとらえ方は、これまでの Melville 批評からあまりにもかけはなれていると感じられるだろう。Melville 自身も、反撥を予想していたためか、屈曲したえがき方をしている。自然の運行や現象を傍証として取り入れたり、聖書の中の伝承を大胆に解釈したりして、Melville は、彼の想像する復楽園の夢には、論理の首尾一貫性があることを示そうとした。

未知の海を航海していく、といった比喩は、人間の心という未踏の領域を探究するという主題にとっては、まったく適切な手法である。フロイト理論の現われる以前にもかかわらず、Melville が深層心理という、人間の内面に存在する海と、そこに投影される表象の意味をすでに感じとっていたのは、注目すべきことである。Melville がフロイトに先行していたといえるのは、Melville が、人間の意識の根底には性があり、宗教のような、人間の高次の意識活動も、リビドー幻想の上に成り立っている、という認識をもっていたからである。

*Moby-Dick*は、女性がほとんど登場しない作品のようにみえる。Melville は、男性原理が女性原理よりも優位にあると考えているようにみえる。しかし Melville は、高次の精神の域に達するためには、女性の要素が不可欠であると思っていた。このばあい、女性原理の意味は、拡大解釈されてはいる。また、男性と女性のもつ意味については、聖書に由来する考え方が踏襲されている。

*Moby-Dick*は、男性ばかり登場する作品のようにみえるが、その根底には、つぎのような考え方がある。神は男性であって、配偶者を持たない。神は完全であるから、その必要がないのである。Adam は、神の姿に似せてつくられていたのだから、彼も一人で充足し、女性を必要としないようにつくられていたはずだからである。Eve は Adam の肋骨から作り出されたのであるから、Adam が失われていた肋骨を取りもどすことができれば、Adam は神のように完全な人間の姿になって、もはや女性を必要としなくなるであろう。

完全な人間がつくられるためには、男性と女性の完全な結合がなければならない。ここに新しい人間を創造するためには、聖なる結婚がなければならないという考え方が出てくる。男性と女性の結びつきとは、ここでは、かならずしも、自然の性をそなえた男性と女性である必要はない。フロイドによる解釈のように、拡大解釈を繰り返して、もとの型からは想像もつかないほどに変形されてしまった男性原理と女性原理になりうることもある。Ishmael と Queequeg との関係や、Ahab と白鯨との結びつきは、そのような聖なる結婚といった、儀式としての次元でとらえることができるのではないだろうか。

Ahab は、彼自身の中に Adam の記憶があると思っている。だから、彼自身の中に Christ をもつことができるという認識が成り立つのである。Adam を罪に導いた不完全な肋骨のかわりに、Ahab は、聖なる抹香鯨の骨で、Adam の欠損を補おうとした。

*Moby-Dick* には、表面の意味とその奥にかくされた意味とがある。両義的あるいは多義的な意味が、さりげない語句の中にくまれている。Melville 自身が周到に意図をかくしているために、両義的な意味を持つはずの表現のうち、表面の意味だけが浮び上って、他方のかくされた意味が不明のままである。かくされた部分に、*Moby Dick* の本質的な意味があるにもかかわらず、その部分の解釈は、ほとんどなされていない。

*Moby-Dick* の文体には、特徴がある。その特徴がわかれば、文体のからくりがわかり、何がかくされているのかがよくわかる。主題になっている問題点を解くために、鍵が用意されている。問題の提出の仕方に、ある種の秩序があって、その方法がわかれば、かくされた意味をみつけ出すのは、むづかしいことではない。

ETYMOLOGY には、かくされた意味を見出すためのもっとも重要な手掛りがかくされている。手掛りは、一つ一つの単語そのものの中に、分離しがたく付着しているのである。ETYMOLOGY は、二種類 (p. 3 と p. 5) あって、関連しあっているが、それぞれおもむきが違う。はじめの ETYMOLOGY (p. 3) では、言葉の両義的な使い方が、実例をもって示されている。あとの ETYMOLOGY (p. 5) では、鯨にはかくされた意味があるということが示されている。

はじめの ETYMOLOGY では、そこに書かれている語句や文章が、同時にまったく別の二通りのイメージを呼びおこしており、一方は、表面の字義どおりでは、とるにたらない意味をもつにすぎないが、他方では、重要な意味があり、それが、表面からたくみにかくされている。あとの ETYMOLOGY (p. 5) についても同じことがいえる。表面の意味は擬装であるから、かくされた意味を読みとるようにしなければならない。

Danish では鯨を hval という、なぜかといえば、Danish では、hvalt は円屋根の、の意だから、と Melville は文中に書いているので、Melville は、鯨は hval であると知っている。それにもかかわらず、Melville は、Danish では鯨は HVALT であると、すぐそのあとで綴っている。Melville は、まちがいを承知の上で、鯨が円屋根や蒼穹 (arched and

vaulted) にかたがちが似ているのを強調したかったにちがいない。

PEKEE-NUEE-NUEE, Fegee.

PEHEE-NUEE-NUEE, Erromangoan.

これらは、いるかのなき声のようでもあるが、よくわからない。Fiji を Fegee と綴りかえている。このため、EE の発音が強調されているようである。Erromangoan には、error + monger (まちがい屋) のひびきがある。Hebrew や Greek をはじめ、鯨をあらわす単語はまちがいだらけである。EE には、error excepted (まちがいは別として) の意がある。すくなくとも、Melville は、なにか目的があって、綴りをかえたらしい、ということはいえる。

推測できる理由はある。ETYMOLOGY (p. 5) で、読者に与えられている謎は、まず、つぎの文である。

While you take in hand to school others, and to teach them by what name a whale-fish is to be called in our tongue, leaving out, through ignorance, the letter H, which almost alone maketh up the signification of the word, you deliver that which is not true.

この文の表面の意味は、「あなたが、他の人を教える仕事をはじめるとき、鯨は英語で何と呼ぶべきかを教えようとして、うかつにも、Hの文字をはずそうものなら、あなたは、真実ならぬものを伝える、whale と綴るべきところを、まちがって黙字のhをぬかしてはならない」、といった程度の軽い意味にみえる。しかしHが頭文字で綴られていることや、「Hの字だけが、この語の根本意義を構成している」、とのべられていることなどから、ほんとうの意図は、べつのところにあることに気づく。鯨は何と呼ばれているか、ではなくて、「何と呼ばれるべきか」(by what name a whale-fish is to be called)、もおかしい。上の文からでは、鯨の意義と、頭文字で綴られたHの字義とは、切り離せないことになる。

ここに、二本の柱 (column) がある。一つは、左欄のいくつかの国語の、鯨をあらわす語からなる柱と、もう一本は、右欄の国語名をつらねた語からなる柱である。Hという文字をよく眺めると、二本の柱が立っていて、それが一本の線で結ばれているように見える。ところが、語からなる左欄と右欄の二本の柱は、左右が繋がらない。綴りや意味が正しくないために、左右が一致しないからである。しかし、一致しないように見えるのは、みせかけであって、ほんとうは、左欄と右欄は一致しているのかもしれない。何と呼ばれているか、と何と呼ばれるべきか、とは大いに違うのであるから。最初べつしたとき、読者の頭の中では、左欄と右欄の二本の柱は、たがいに結びつかない。つまり、二本の柱が、たがいに完全に一致するとはいえない関係で立っている。しかし *Moby-Dick* を読みすすめていくうちに、一致しているとは見えない左欄と右欄が、やがて、緊密に結びついてくる、というより、結びついているのが理解できてくる。二本の柱が中央でたがいに結びつ

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴について(2)

いているのが理解できてくる。つまり、Hの字が読者の頭の中で完成されてくる。記号化されたHの字の意義が理解できなければ、*Moby Dick* の意味はわからない、と Melville は、読者に、なかば警告と、なかば解答を与えているのである。

*Moby-Dick* では、Hの字の意味するエニグマを解明することが、作品の読み方のもっとも重要なポイントになる。Hの字の意味するものを、うっかり読みおとすことになれば、この作品の意図がまったくつかめないことになる。

Hの字の意味するものとは、要するに、視覚的な図像がもっとも適確に示してあるとおりであって、二本の柱が一本の線で連結されているのである。

柱は、建築に際して、もっとも基本的な構成部分である。前面から見たばあい、二本の柱は、最少限度不可欠の要素である。

永遠の生命の認識に到達するということが、聖書ではしばしば、建築の比喩表現をもって述べられている。神は、最高の建築者であって、この世を創造された。イエス・キリストの養父ヨゼフの職業が大工であったことや、ソロモンの神殿の寓意などから伺い知ることができるように、神の神殿を建てよ、と聖書が説くことの究極の意味は、われわれ人間の肉体と魂を神が宿るにふさわしい神殿にせよ、ということである。そういうことが可能であるように人間の体はつくられていたはずである。神はみずからの姿に似せて人間を創造されたといわれる言葉の真意はこのあたりにあるにちがいないのである。

そういった意味での建築にあたっては、肉体と魂は、抜きがたい二本の柱である。肉体と魂、あるいは現世と来世、あるいは物質と精神など、これらの相対立するごとく見える二つの要素は、どちらか一方が尊重され、他方が疎んじられるべきものではけっしてない。前者は後者を確立するためには不可欠の要素であって、物質の要素の足掛りなくしては、精神を高みに揚げることはできないのである。いいかえると、五感のそなわった肉体の介在なくしては、人生の限られた時間内に効率よく魂に永遠を認識させ、魂を不滅の世界へ回帰させ、帰属させることは不可能である。Hの字が象徴しているのは、二本の柱がたがいに有機的にそれぞれの機能を果すべきものでありその基盤の上に立ってはじめて人間は神から与えられた課題を理解でき、そして理解するとはすでにその課題をなかば達成したことになる、ということの意味している。

Melville が *Moby-Dick* の本質的な要素を故意にはぐらかせて、神秘化のヴェールに包んで示す手法を用いている理由は十分理解できる。自然が人間に語りかけてくる方法は、いうまでもなく、言語によるのではなく、自然の運行や事象などを通して語りかけてくるのであるから、自然が語りかけてくる表象を敏感に把握し理解できれば、自然を動かしておられる神が人間になにを伝達されようとしているかを理解できることになるはずである。Melville は、したがって、神が人間に意図を伝達される同じ方法を模倣して、この作品の手法にしようとしたのであろう。Melville は、表象や図像や符号を用いて、あるいは重要

な意味を暗示する情景をえがいて、この作品の意図を伝えようとしたのである。Mystification の手法を用いていても、あれだけ多くの紙数がついやされているので、Moby-Dick のかくされた意味を理解するためには充分以上の説明がつくされているのである。自然の語る言葉にしても、それは黙示で語られるのであるから、意をつくせない部分は、神の言葉の集積である文書宗教としての聖書とそのたらないところを補完しあって、全体としては神の意図は十分に人間に伝えられる仕組みにはなっているのである。ただ罪のためというべきか、人間の認識能力がくもっているために、人は、迷盲の中をさすらい、樂園に帰る方法や神の意図がわからないだけのことであるかもしれない。聖書の中で語られているエニグマの言葉のはしはしに、また自然観想による直観の中に、不死の樂園を回復する方法が示されているはずだ、というのが、Moby-Dick の主題である。そういった認識の仕方は、まさしく、Melville が超絶主義者であったことを示している。

Ishmael という名には、かくれた意味がある。この名には、聖書による由来からすれば、正統な世嗣からはずれた追放者の意がある。そのため Ishmael は、Eden の東に追放された Adam と境遇を同じくする。Ishmael は、やがて一つの民族の父祖となることが追放のときに約束されていた。(Gen. 3:15) Adam も、追放される時、樂園の回復を約束されるから (Gen. 16:17~17:20)、この点でも Ishmael と Adam は立場と境遇に共通性がある。

Ishmael という名はまた、発音上、Issue+male に分解できる。生命の種子を伝播する、の意があって、Adam と同じく、人間の父祖の意がある。Melville の深慮遠謀がうかがわれる。

Ishmael という名と関連して、抹香鯨の形状についても想像をたくましくすることができる。太古から人類の意識の中には、男根崇拜の願望がある。抹香鯨は、巨大な男根そのものである。やや前方にまっすぐに吹き上げられる汐吹きや、sperm という種属名からして、抹香鯨こそ Issuing-male (=discharging sperm) の巨大な表象である。

鯨は、聖書によると、神が創造された生物のうち最初の被造物である。

And God created great whales, (Gen. 1:21)

And God blessed them, saying, Be fruitful, and multiply, and fill the waters in the seas. (Gen. 1:22)

そして神は、生めよ、ふえよ、海の水に満ちよ、といわれて鯨を祝福される。鯨は、豊穡の表象なのである。

EXTRACTS の中で、Melville は、生めよ、ふえよ、のくだけは引用していない。Melville は、なかばあらかし、なかばかくす手法を用いているので、生めよ、ふえよの語句は、わざと引用していないのだとおもわれる。抹香鯨は豊穡シンボルだといってしまう、まことにあからさまで、白鯨のもつ神秘性がそがれることになるからだろうか。

抹香鯨が豊穡の表象であることについては、*Loomings* の章では、わずかに暗示されているといった程度である。わずかではあるが、たしかに暗示されているのである。

地形から見て、岬は、抹香鯨の形に似ている。つこの形にも似ている。つのは、いうまでもなく豊穡の表象である。そして、ホーン岬は、想像されうるもっとも雄大な豊穡の表象であるといえる。そうすると、*Patagonian sights and sounds* (p. 30) の *Patagonian* は、ホーン岬のあるところであるから、抹香鯨と豊穡を関連づける暗示といえる。

岬を暗示するためであるかどうかは不明であるが、Cape の C をあらわすものとおもわれる大文字の C が、*Loomings* ではひんばんに現われる。

There now is your insular city of the Mantattoes, belted round by wharves as Indian isles by coral reefs—commerce surrounds it with her serf. Its extreme down-town is the battery, ..... (p. 24)

*insular city* は岬のことである。*Indian isles* の I の文字や *battery* の語も、フロイドの考え方からすれば、岬と同様の連想をおこさせる。上の文章には、また、*belted round* や *coral reefs* や *surround~with* など円形の暗示がある。その円形は、どこか一ヶ所に途切れがあるようである。すぐあとにつづく文章とくらべてみるとさらにはっきり、この連想があやまりでないことがうらづけられる。

Circumbulate the city of a dreamy Sabbath afternoon. (p. 24)

Go from Corlears Hook to Coenties Slip, and from thence, by Whitehall, northward. (p. 24)

*Circumbulate* は円形を、*Corlears Hook* と *Coenties Slip* は地形が岬のように張り出していることをさしているであろうし、*Circumbulate* の C、*Corlears* の C、*Coenties* の C は、一ヶ所途切れた円形とも *Cape* の C ともうけとれる。もっと想像をたくましくすれば、C と I の文字は、女性原理と男性原理が記号化されたものともうけとれる。*Moby-Dick* の全篇を通じて、広大な宇宙的規模のリビドー幻想がうかがわれるのである。

岬の形は、また、地の柱としてのイメージでもある。上の引用文にすぐつづいて同じページに、柱を連想させる語がいくつかある。*Posted ...*, *silent sentinels ...*, *stand ...*, *piles ...*, *high aloft ...*, *there they stand ...*, などである。立っている、ということが強調されている。上の引用文の中の *Whitehall* もただ、地名であるだけではなく、建物あるいは殿堂という意味が余韻としてひびく。*Loomings* の章のおわり近くにある、白い頭巾をかぶった雪の山のような幻 (*one grand hooded phantom like a snow hill in the air*) (p. 30) と白亜の殿堂、とには、なにか秘儀めいた雰囲気がある。

ものいわずじっと立っている人物像からは、建築の柱、人像柱 (*Caryatid*) など神殿の前面を構成するもの、または人柱墓石などのイメージがある。*Loomings* には、頭文字の C がちりばめられている感がする。 *Call me Ishmael/Cato*, (p. 23) *Circumbulate/*

Corlears/Coenties/China/(p. 24) Commodore/Captain/Cook (p. 26), Commodore (p. 28) Contested/Chief (p. 29) などがある。頭文字の Capital には神殿建築の柱頭の意がある。また Capital には、基本の、根本の、の意があり、その語源は head であり、cap, cape, capitol の意がふくまれる。さきの引用文の中の Manhattoes は、Melville がかえた綴りであるが、これなども、改作の意図は十分に読みとれる。つまり、Manhattoes は Man+hat+toes に分けられる。hat は、head と関連がある。toes は tail の意である。Heads or Toils の章があることもさりながら、頭と足は、この作品では特別の考慮が払われている。

Ishmael は、さまざまな風景を心の中にえがき、ここに示している。これらは、Ishmael の脳裡に湧き出てきて、Ishmael が幻視者かあるいは黙示を受ける人であるかの印象を与える。これらの風景は、この作品の原風景であり、出発点である。これらの風景は、作品の伏線となり、作品を解釈するにあたって、重要な手掛りとなる。Ishmael の瞑想する田園風景の中に、何本かの樹が立っている。どの樹も幹がうろになっていて、隠遁者の磔刑像と重なり合う。この絵は、一つの楽園の想像図である。ここには、牧羊者の頭部 (shepherd's head) (p. 25) があり、時は 6 月 (Prairies in June), おに百合 (Tiger-lilies) が咲いている。牧羊者の頭部は、キリストのそれであって、6 月の百合、からはヨゼフが連想される。6 月の夏至祭はヨゼフの日であるからだ。百合は聖母マリアの花でもある。

Tiger-lilies のすぐあとに Narcissus について言及がある。水仙は水辺に咲く花であるし、水の上に咲く水蓮も水百合 (water-lily) と呼ばれるので、Tiger-lilies には水蓮の連想がある。水の上に咲く花は、この作品の中では、象徴として大きな意義がある。水蓮は、水と空の接するところ、水と空の境界線、もっと敷衍して云えば、天と地を分かち地平線上に咲く花である。ヨゼフの杖に咲いたバラのつぼみと同じように、天と地、つまり不滅と必滅、の境界線上に咲く花は、希望、永生、成就などの表象であるからである。

つづいてすぐ、Tennessee と Rockaway Beach という地名が出てくるのであるが、Tennessee は、Indian の言葉で Big bend である。また Rockaway Beach は Long Island の海岸のことであるから、湾曲したもの、凸状のもの、長いもの、などの意があって、すでに述べた岬状の形がここにも暗示されていることになる。

この風景は、Ishmael が心の中にえがく風景である。

the dreamiest, shadiest, quietest, most enchanting bit of romantic landscape ...

here sleeps his meadow ... the picture thus lies in tranced, (p. 25)

夢見心地の忘我の状態の中で、この風景が瞑想されたものであることがわかる。dreamiest, shadiest, quietest, most enchanting と、どの語も最上級になっていることに注意。ここでは、羊飼いの目 (the shepherd's eye) が、呪縛力のある水面 (the magic stream before him) をじっと眺めている。さらに気づくことは、his trees や his meadow など、his

という人称代名詞が用いられることである。この風景は、瞑想の中に存在するのであるから、この his は、crowds of water-gazers (p. 24) の一人一人を、あるいは、水にとびこんだ Narcissus (p. 27) をさしているともみなしてさしつかえないわけである。また Ishmael が陶酔的な性情の一面をもつことを示しているともみなすこともできる。また、did you yourself feel such a mystical vibration? (p. 25) とあるから、もっとも深い瞑想の中にある者なら、この his は、誰であってもよいことになる。

人が水面をみつめているとき、このような牧場の風景が浮かび上がってくるなら、その人は水面を眺めているというよりは、むしろ、自己の潜在意識の中を眺めているのである。Narcissus や water-gazer が眺めているものは、自己の潜在意識の中なのである。さらにいえば、Ishmael も白鯨も Ahab も、人の潜在意識の中に眠っていたものが、覚醒してたちあられたものである。Ishmael も白鯨もその他のすべての登場人物も海の生物も、凧も嵐も、人間の潜在意識の中に存在するものであり、究極的には、それらの事象や風景は人間の心のさまざまな相をあらわしていることになる。

それだから心の中に映る牧歌風景を見て、その風景と合一しようとして、Narcissus は水にとび込んだともいえる。water-gazer が憧れるのは、自分の心の中に映る楽園にたいしてである。しかし、やみくもにとび込んでも、むなしく水没するばかりで、楽園を得ることはできない。その風景画の中には、磔刑像がかくされているのであり、人はそれぞれ自分の (his) 磔刑を完成させなければならない。... this pine tree shakes down its sighs like leaves upon his shepherd's head, ... (p. 25) とあるが、この松の木は、人の憧れ (pine) である生命の樹でもあり、棺台となったアメリカ松材でもある。人は、自分が自分のキリストとなって、十字架の秘跡を果さなければ、永遠の生命を得ることができないのである。キリストと一つになるとはこのことをいうのである。

Let the most absent-minded of men be plunged in his deepest reveries ..., he will infallibly lead you to water ... (p. 25) というとき、人が足をむけて進んでいく方向は、自分の心の中にある海にむかってである。また、meditation and water are wedded for ever (p. 25) も心の中のメカニズムのことをいっているのである。人が外界にみるところの、客観的に存在しているとおもわれている海洋は、超絶主義の見方からすれば、人の内面に存在する精神の海が外界に投影されたイメージにすぎなくなってくるのである。

Narcissus の物語には深い意味がある。彼は、泉の中の、たおやかな自分の映像に恋い焦がれる。その映像は、内面に存在する自己の本質の幻 (phantom) なのである。つまりそれは、自己の Over-soul が、自己の内なるところに存在する海の水面に浮び上ってきた映像なのである。内なる海の奥深くのどこかに、Over-soul が、Arethusa の泉のように、湧き上ってくる通路があるのかもしれない。Narcissus が泉の中に見たものは、彼自身の Oversoul である。Narcissus の肉体は、彼自身の Over-soul と結婚したくて、とび込んこ



にすべだのだ。人はみな、いずこの川や海であっても、Narcissus の見たものを見る、そして、そてを解く鍵がある、と Melville は云っている。これらのことについて、Melville は、つぎのように云っている。

Surely all this is not without meaning. And still deeper the meaning of that story of Narcissus, who because he could not grasp the tormenting, mild image he saw in the fountain, plunged into it and was drowned. But that same image, we ourselves see in all rivers and oceans. It is the image of the ungraspable phantom of life; and this is the key to it all. (p. 26)

この引用文には、手法上、一つの特徴がある。こういったことには意味がなくもないのだとか、じつはもっと深いわけがあるのだとか、これがすべてを解く鍵なのだとか Melville が云うとき、Melville はあえて説明をひかえている、と感じられるふしがある。しかし Melville は、かならずべつの方法で、それと気づかれないように、説明をほどこしているのである。What do you see? (p. 24) と Melville がいうとき、かならず、それは、そこにふくまれるかくされた意味がわかるか、という読者にたいする問いかけなのである。たとえて云えば、禅の公案のように、Melville は、たびたび、問いかけて、もし答えられなければ、根本の要諦がつかめない、と注意をうながす。また、たとえていえば、道を行く旅人に謎をかけて、解けなければ死あるのみ、と強要したスフィンクスの喩えを、Melville は、手法として取り入れているようにもおもわれる。人は、自分が自分の救済者にならない、生命の道を見つけるのは容易ではない、など、そういう内容を表現するには、それにふさわしい表現方法が必要であるが、*Moby Dick* の手法は、内容と不可分であり、これ以外に方法はなかったのかもしれない。

Ishmael は、復活の可能性について、やはりかなりわかりにくく暗示している。

I never fancied broiling fowls; — though once broiled, judiciously buttered, and judgmatically salted and peppered, there is no one who will speak more respectfully, not to say reverentially, of a fowl than I will. It is out of the idolatrous dotings, that you see the mummies of those creatures in their huge bake-houses the pyramids. (p. 27)

ピラミッドを巨大な窯にたとえて、焼鳥云々といっているのは、不死鳥への言及であろう。Ishmael は、不死鳥にたいして、自分ほど敬意を払うものはいない、といっている。また、つぎの文章も、復活への言及である。

No, when I go to sea, I go as a simple sailor, right before the mast, plumb down into the forecastle, aloft there to the royal mast-head. (p. 27)

船に乗るときには、下級船員として乗る、だが、最上檣の帆柱を背にして垂直に立つ、と Ishmael はいっているが、Ishmael が背にしている帆柱は、どうやら十字架の形をしてい

る。また帆柱を背に垂直にすっと立っている Ishmael は、Manhattoes の埠頭にたたずむ立像のような人々の姿に、そして瞑想風景の中に立つうろになった樹木や、そこに入っている隠遁者や、十字架、に重なりあっているようにおもえるのである。ところで、上の引用文にみられる No は、どの版も No になっているが、これは Now でなければおかしい。この No, when I go to sea (p. 27) は、Now, when I say that I am in the habit of going to sea (p. 26) と対句になっているからである。

さらに Ishmael は、彼が海に出る動機と理由をのべている。何度も、これから海へ出るつもりだ、と彼はくり返している。

- ① I thought I would sail about a little and see the watery part of the world. (p. 23)
- ② then, I account it high time to get to sea (p. 23)
- ③ I quietly take to the ship. (p. 23)
- ④ No, when I go to sea (p. 23)
- ⑤ Now, when I say that I am in the habit of going to sea (p. 24)
- ⑥ Again, I always go to sea (p. 28)
- ⑦ Finally, I always go to sea (p. 28)
- ⑧ Chief among these motives was the overwhelming idea of the great whale himself. (p. 29)

もっとも大きな理由は、Ishmael が白い雪の山のような白鯨の幻を見たことである。meditation and water are wedded for ever (p. 25) とあるように、Ishmael にとって、海は彼の心であり、また海はすべての人の心でもある。Ishmael は、航海にさきだって、彼の心の中に白鯨を見、その幻を見たために、彼は航海に出ようとする。Ishmael の中にある白鯨が、彼を航海へ誘うのである。心と潜在意識は、このばあい同一のものである。Ishmael の潜在意識の中から浮び上った白鯨が、彼の捕鯨航海への動機を与え、のちに Ishmael が白鯨を追って経験したことも、すべて彼自身の心の海でおこったできごととして、結局は、帰着するのである。Ishmael は、つぎのような幻を見る。

By reason of these things, then, the whaling voyage was welcome; the great flood-gates of the wonder-world swung open, and in the wild conceits that swayed me to my purpose, two and two there floated into my inmost soul, endless processions of the whale, and, mid most of them all, one grand hooded phantom, like a snow-hill in the air. (p. 30)

ここにあげた幻のほか、Manhattoes の波止場にたたずむ人々の群、田園風景の瞑想、ピラミッドの連想、ホーン岬の疾風怒濤 (Patagonian sights and sounds) (p. 30) の光景などが、Ishmael の潜在意識の中から、つぎつぎに湧き出てくる。この wonder-world は、外面では、白鯨を追う航海とそれをつつむ大自然のことであろうが、内面では、あくまでも

象徴としての意味をもつのである。wonder-world は、人の内面に存在するのであり、むしろ内面の wonder-world が実在であるというべきだろう。この文から、wonder-world への通路と門は、人の潜在意識の中にある可能性がある。その可能性とは、Ishmael のいう wild conceits であるかもしれない。Ishmael は、潜在意識を inmost soul と呼んでいる。swung open からは、氷河でできたかの水門が、轟音と水沫をあげながら、割れて開くさまが想像できる。swayed me からは、Ishmael が、めくるめく意識の中で、自己の意志を超越したかの力によって、彼が航海へ押し出されていくのが感じられる。神秘の世界の水門が大きく開き、そこから左右に、二頭また二頭と、かぎりなく鯨の列が続き、その中央には、空中にそびえる雪の山のような、頭布をかぶった崇高な幻がある。これが、白鯨の幻である。この雪の山のような幻は、連なる白い山脈をおもわせる。

Loomings の章には、山を連想させる語がほかにもある。それは、AFFGHANISTAN についての言及である。AFFGHANISTAN には、あの仏教発祥の地のもっとも聖なる山である Himalayan 山脈がある。また、Pathagonian (p. 30) についても、同じことがいえる。ホーン岬の近くにある Pathagonian 山脈にも雪の山のイメージがある。Himalayan 山脈、Pathagonian 山脈は共に、白鯨のイメージが、かぶせ合せられているのである。

頭布をかぶったような幻が、太陽に焙ぶられた白い pyramids (p. 27) や、波止場の通りの Whitehall (p. 24) にもつながっている点を考えるなら、この幻は、なにかの祭儀の対象であることを暗示しているといえる。たとえば、古代エジプトの大地の女神・豊穡の女神 Isis が考えられる。Ishmael は、ホーン岬についてたびたび言及するが、ホーンは、豊穡を意味し、Himalaya や Pathagonia の山々も、大地に直立する白いつのを連想させる。白いつのは、柱を連想させる。世界の高峰、白い山脈は、地の柱を連想させる。

二列に並んだ鯨の行列は、抹香鯨の下あごの歯のようにも感じられ、もしそのように解釈するなら、二列に並んだ歯の奥に入っていくためには、人は死ななければならない。ヨナの経験を追体験するための通過儀式にしる、これは、やはり、犠牲の祭儀である。

Ahab は、白鯨を壁とみる。彼は、白鯨を生と死の世界の境界に立ちはだかる壁とみる。壁のむこうには不滅への道がつづくはずだと信じて、Ahab は、自分の中にキリストを再現しようとする。みずからをいけにえにして、死の門をくぐるためである。白鯨は、Ahab にとって、目の前に立ちはだかる白い壁であり、また門であり、柱であり、十字架であり、彼自身の墓石でもある。ホーン岬についても、象徴として同じことがいえる。船がホーン岬を通過するとき、人は、はるか家路をふりかえり、この荒波を乗り越えてふたたび帰えることはあるまい、というおもいとらわれる。人は、ホーン岬を通過するとき、いずれくぐらなければならない死の門にむかって、今出発し、現世への愛着を捨てなければならないと感ずる。ホーン岬を通過するとき、人は、わが身の不退転であることを悟る。ホーン岬を通過するとは、象徴として、通過儀礼となるのである。

ホーン岬には、Pathagonia 山脈とだぶらせた白い色のイメージがあり、そのため骨や墓石のイメージもある。鯨骨のことを、Ishmael は、しばしば象牙にたとえるが、象牙の門とは、古来、夢の門にたとえられてきた。ホーン岬とは、潜在意識の中にある夢の門のことでもある。この門をくぐって、心の中の海を奥深く航行して、心の大洋の中に寂滅をみつけるために、Pequod 号は出かけるのである。ちょうどアルゴ船が金羊毛を探し求めたように、Pequod 号は、心の霧の中の幻の白鯨を求めて出かけるのである。じじつ Pequod 号とアルゴ船は、だぶり合せられていて、星座の船座のアルゴ船ともだぶり合せられているのである（後述）。Ahab は、彼の魂の不滅性を探するために航海に出かけるのである。白鯨は、Ahab の魂を不滅へ導くための船でもあり、神秘の水門をくぐる通路でもある。人が心の中に Ahab の軌跡をおもいうかべるなら、その人もまた Ahab と同様、夢の門をくぐり、みずからの内なる海へ航海に出て、わが魂の不滅のなんたるかに思いをはせずにはいられない。神や宗教、高貴なる願望のすべても、その夢の門の中に存在するのかもしれない。星座の船座は、天の南半球の海を抹香鯨の噴き上げた潮かとばかりにみえるミルク色の潮路をかがよい進む。星座は、人のさまざまな宿業の相をあらわして、鏡のように人の願望や潜在意識を映しているかにみえる。ミルクの道は、神秘の水門に至る道かにみえる。

すでにのべたように、ホーン岬のホーンには、豊穡の意がある。ホーンには、生殖と繁栄の意がある。ホーンはまた、Eros のシンボルでもある。Eros は生殖と多産を司る原動力となるが、しよせんこの世の生命は、はかないものである。Eros にはまた、混沌と陶酔に支配され、豊穡の明るさとうらはらに、死の思いがつきまとう。肥沃な大地の色は暗黒である。その色は、浄化されると白になり、Himalaya 山脈の頂上のように白く輝く。その輝く色は白骨の色でもある。

Ishmael は、ホーン岬とそこにそびえる Pathagonia の山々の幻を自己の内に認めて、かぎりない神秘を予感する。Loomings という語には、そういった霧の中にかいま見る巨大なるものの姿の意のほか、織機の意も含まれているかもしれない。また、羅針盤のような、方向を指し示すものの意ともとれる。第1章の Loomings には、作品全体の意味やかくされた意図を把握するための指針となる方向が指し示されているのであり、Loomings には、物語の語り手である Ishmael の性格や資質が、もっともよく説明されている章でもある。Ishmael は、きわめてよく観察し、客観的に語っている。彼は、外からの影響を受けない冷静な人のようにみえる一方、きわめて受動的で、感応力が強い。豊かな情緒と直感力に富んでいる。彼は、するどい予知力と豊かな想像力をそなえている。見えない力や動きを察知するのにすぐれている。Ishmael は、若者でありながら、神秘の知恵にみち、霊的媒体としての素質をそなえている。彼は、陶酔の中で、見えないものの力に動かされ、幻を見る。そのことは、つぎのような文のはしばしからうかがわれる。

which influences me in some unaccountable way (p. 29)

つづく文も、Ishmaelの魂が、混沌と死のような状態にあり、幻を見たり啓示を受ける準備段階の状態にあることを示している。

Whenever I find myself growing grim about the mouth ; whenever it is a damp, drizzly November in soul ; whenever I find myself involuntarily pausing before coffin warehouses ; and bringing up the rear of every funeral I meet ; and especially whenever my hypos get such an upper hand of me, (p. 23)

Ishmaelは、自分を駆りたてる見えない力に気づいており、そのメカニズムを分析している。

though I cannot tell why this was exactly that those stage managers, the Fates, put me down for this shabby part of a whaling voyage, ... yet now that I recall all the circumstances, I think I can see a little into the springs and motives which being cunningly presented to me under various disguises, induced me to set about performing the part I did, besides cajoling me into the delusion that it was a choice resulting from my own unbiased freewill and discriminating judgment. (p. 29)

Ishmaelは、自分の中に、自分の意志の支配を受けないある種の力が存在するのに気づいている。Ishmaelをうごかす力は、外からの、というよりはむしろ、内からの力である。

With other men, perhaps, such things would not have been inducements, but as for me, I am tormented with an everlasting itch for things remote. I love to sail forbidden seas and land on barbarous coasts. (p. 30)

Ishmaelの潜在意識が、Ishmaelを駆りたてるのである。その潜在意識の底にあるIshmaelの大霊(Over-soul)ともいうべき魂が、Ishmaelを駆りたて、招くのである。Ishmaelは、Narcissusを引き寄せたもの、それが、すべてを解く鍵であるという。

Ishmaelは、すべての船の羅針盤の磁針が人を彼方へ引き寄せるのだろうか、といふかる。

Tell me, does the magnetic virtue of the compasses of all those ships attract them thither ? (p. 24)

その同じ羅盤の磁針が、Ishmaelの心の中で微動し、白鯨の物語を起こさせる動機となっているのだろう。

『ヨブ記』の中に、Elihuという名の若者がいて、ヨブも長老たちも答えがみつからず、考えあぐねていたとき、Elihuが、どこからともなく現われて、神の言葉を代弁する。神も旋風の中から語られて、Elihuの言葉をよしとされる。IshmaelとElihuのidentityが、ここに来て重なり合っているようにおもわれる。Elihuは、神の本質をよく感受する、

予言者の一人である。Ishmael も、神秘の本質を直観する点を考えると、予言者の一人といえよう。Ishmael が潜在意識の中で感じとった *Marvels of a thousand Patagonian sights and sounds* とは、彼にとって、召命の声、黙示の幻であったといえる。

要するに *Loomings* は、*Moby-Dick* 全体の問題点とそれらの解釈のための鍵が用意されている章である。*Moby-Dick* の主題はなにか、それらの主題を表現するために用いられ、繰り返しあらわれる表象や象徴はなにか、モチーフの *overtone* や *undertone* はなにか、そういったさまざまなこの作品全体の目的と概観を示した序奏部といえる章である。この作品を起こす動機づけと理由、さまざまなモチーフがどのように展開されていくかの方向づけなどが示されている章である。したがってこの章については、以上述べてきたような解釈は、この章の印象を概観したにすぎないのであって、具体的にモチーフがどのような意味をもつかは、それぞれ該当する章で個別に検討されるのでなければ、ほとんど意味がない。*Moby-Dick* の各章を検討したあとで、もう一度あらためて *Loomings* について述べなければ、*Loomings* を理解したことになる。この章の語や句の一つ一つに、網目のように交錯し、しかも有機的に意味と象徴がからみついているのである。精神と形は表裏一体の関係にあると Melville は考えているが、とくにそれは、精神は、抽象概念をあらわす言語表現を用いなくとも、具体的なイメージを繋ぎ合わせることによって表現できるとする考え方にあらわれている。精神とイメージとは不可分の関係にあるという考え方が、*Moby Dick* の文体のもとになっている。同じ超絶思想に属しながら、エマソンの *Nature* の文体がイメージ表現を欠いているのと対照的である。

注：使用テキスト：MOBY-DICK ed. by Charles Feidelson, Jr. (Bobbs Merrill)